

要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	安 川 知 世
主 論 文 題 名 Relationship between blood pressure and intraocular pressure in the JPHC-NEXT eye study (筑西眼科研究を用いた血圧と眼圧の関連)				
(内 容 の 要 旨) 眼圧は房水の産生と流出のバランスによって決定され、眼圧の恒常性は主に房水流出抵抗の変化によって維持されているが、外因性の影響を含む様々な因子によって影響を受けることが示唆されている。眼圧の上昇は、視神経の障害とそれに続く視野欠損を誘引し（緑内障性視神経症）、日常生活への大幅な制限につながる可能性がある。諸外国の疫学研究やメタアナリシスにより、血圧と眼圧の正の関連が報告されているが、日本人を対象とした大規模な疫学研究はこれまでほとんどなく、収縮期血圧（Systolic blood pressure：SBP）と拡張期血圧（Diastolic blood pressure：DBP）のそれぞれが眼圧に及ぼす影響は不明なままである。また、日本人の血圧の平均値は過去数十年の間に大幅に低下しているが、高血圧患者の割合は依然として高値である。それゆえ、本研究では血圧に注目し、緑内障の既往や眼疾患手術歴のない日本人集団を対象に、SBPおよびDBPと高血圧の既往が眼圧に及ぼす影響を横断的に検討した。 次世代多目的コホート研究（The Japan Public Health Center-based Prospective Study for the Next Generation：JPHC-NEXT）の付随研究であるJPHC-NEXT Eye Studyのデータを用い、茨城県筑西市に在住の2013年から2017年までの調査に参加した40歳以上の男女6783名を分析の対象とした。参加者は、血圧測定を含む全身検査、非接触式眼圧計による眼圧測定を含む眼科検査ならびに問診表による調査を受けた。高血圧は、降圧薬を服用している、またはSBPが140mmHg以上、またはDBPが90mmHg以上と定義した。さらにSBPとDBPは、欧州心臓病学会/欧州高血圧学会高血圧管理ガイドラインに基づき、それぞれ5つのグループに分類した。高眼圧症は、両眼の平均眼圧が21mmHgより高いものと定義した。 6783名の分析対象者のうち3152名（46.5%）が高血圧を有した。既知の交絡因子で調整した結果、SBPおよびDBPと高血圧の既往は、眼圧と正の関連を認めた。また、高血圧群は非高血圧群と比べ高眼圧症の有病率が約2倍高かった。性別、降圧薬の服用状況による層別化解析でも、概ね同様の結果が支持された。また、高眼圧症に及ぼすSBP/DBPの単独及び混合効果を検討すると、SBPがDBPよりもより高眼圧症との関連が強く、SBP高値かつDBP高値の群のオッズ比が最も高かった。 本研究は、日本人集団において、SBPおよびDBP高値と高血圧の既往は、眼圧および高眼圧症の有病率と正の関連があることを示した。これらの結果から、非緑内障眼において、血圧上昇は眼圧上昇に影響を及ぼす可能性が示唆された。				